

The Poet and The Lunatics: Gilbert Keith Chesterton

紀田順一郎 荒俣宏
責任編集

世界幻想文学大系 ⑫



世界幻想文学大系 責任編集—紀田順一郎十荒俣宏

第十二卷

詩人と狂人達

昭和五一年六月一日印刷 昭和五一年六月一五月初版第一刷発行

著者—ギルバート・ケイス・チェスタトン

訳者—福田恆存

発行者—佐藤今朝夫 発行所—株式会社国書刊行会

東京都豊島区巣鴨三—五—一八 郵便番号一七〇 電話〇三—九一七—八二八七 振替東京六五二〇九

造本—杉浦康平十鈴木一誌

印刷—セイユウ写真印刷株式会社十明和印刷株式会社 製本—大口製本印刷株式会社

定価—二、〇〇〇円

●—落丁本・乱丁本はおとりかえします

福田恆存 ふくだつねあり

一九一二年、東京生れ。

東京大学文学部卒。現在、

劇団昂を主宰。

専攻 英文学、演劇。

主要著訳書—

『福田恆存評論集』（全七巻）

新潮社、一九六六年。

ロレンス『恋する女たち』

新潮社、一九五二年。

『シェイクスピア全集』（全二三巻）

新潮社、一九五九年—

チェスタトン『正統とは何か』

（『チェスタトン著作集1』、共訳）

春秋社、一九七三年。







詩人と狂人達　ギルバート・ケイス・チエスタトン——福田恆存〓訳



目次



∞ ——— 詩人と狂人達 ギルバート・ケイス・チェスタトン

∞ ——— 第一章 — おかしな二人連れ

46 ——— 第二章 — 黄色い鳥

80 ——— 第三章 — 鱈の影

116 ——— 第四章 — ガブリエル・ゲイルの犯罪

152——第五章——石の指

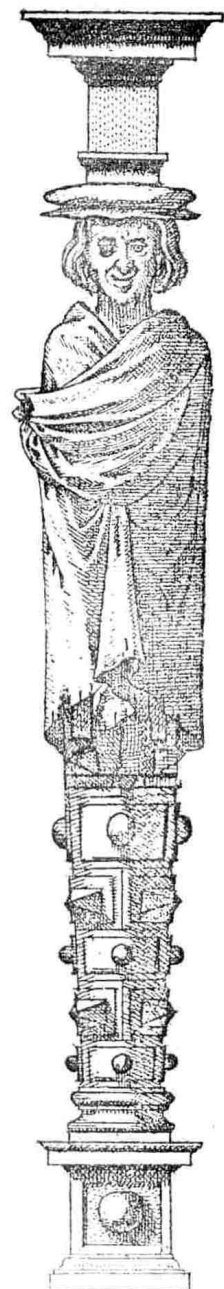
188——第六章——孔雀の家

220——第七章——紫の宝石

260——第八章——危険な収容所

298——四人のチェスタトン——安西徹雄





詩人と狂人達——ガブリエル・ゲイル生涯の挿話





第一章——おかしな二人連れ

《昇る太陽》という名のその宿屋は、「沈みゆく太陽」といったほうがしっくり似あう外観をしていた。この宿屋は、狭い三角形の庭に立っていたが、庭は緑色よりも灰色が強く、崩れ落ちた生垣が、メランコリックな河芦とまじりあい、屋根も腰掛もともに潰れた暗く湿っぽい四阿^{やまや}があり、薄汚れた、水の出ない泉のほとりには、雨風に色あせた水の精の像が立っていた。宿屋の建物そのものは、蔦が一面に覆っていたが、それは、蔦で飾られているというより、蔦に吞みつくされているといった感じだった。竜が古骨に巻きついて砕き折るように、巨大な寄生植物がこの建物の茶色い煉瓦を次第に壊していたのである。宿屋の反対側は、道路に面していた。丘を越えて河の浅瀬のある地点に達しているさびれた道で、下の方に橋が出来てからというもの、この道を使うひとはほとんどなかった。玄関のすぐ外に、一台のベンチとテーブルが置かれ、その上に、かなり黒ずんだ木の看板があり、元来が太陽を表わす金の円が、茶色の円と化して見えていた。さて、この看板の下に、宿屋の主人が立って、憂鬱そうに道路を見つめているのである。主人の髪は黒く、ふさふさとしておらず、斑らな紫色をした顔には、日暮どきの美しさといかぬまでも、日暮どき

の陰鬱さがすべてこめられていた。

ここにゐるひとで、いさかなりと活気を見せていたのは、いままさに宿屋を立ち去ろうとしている人物だけであつた。この男は、ここ数カ月中での最初にして最後の客であり、いわば、折角やって来たのに、そのあとに当然きたるべき盛夏を伴わない孤独な一羽の燕といったところで、おまけに、この燕は移動しようとしている矢先なのだ。その男は、休暇旅行中の医者で、まだ年若く、醜いながらも愛嬌があり、剽軽な顔は斧のように尖り、毛は赤色だった。そして、猫のように活潑なその動作は、河の浅瀬近くのこの沈滞しきつた宿屋の無気力さと対蹠的だった。いま男は、看板の下にあるテーブル上の鞆を、革紐で縛っている最中だったが、そこから一ヤード離れて立っている主人にしても、家のなかでこそそそと鈍重そうに動いているただひとりの召使にしても、それに手を貸そうとはしなかった。手伝ってやらないのは、不機嫌だったためとも考えられるが、あるいは、ぼんやりとなにもしないでいることに慣れきっていたためにすぎなかったのかも知れない。

無為のひとつと、まめに動いているひととの両方を包んでいたこの永い沈黙は、ふたつの鋭くけたたましい音によつてはじめて破られた。第一の音は、テーブルの上の鞆に医者が縛りつけていた革紐が不意に断ち切れた音で、第二の音は、紐が切れたことに対して医者が大声で陽気に発した「しょうがない!」ということばだった。

「面倒なことになった」と、ガースという名で通っているこの紳士医者がいった。「こいつをなにかほかの物で縛りあげなくちゃ。

コードかロープかなにかありませんか？」

メランコリックな宿の主人は、いともおもむろに向き直って、屋内にはいり、ほどなく、輪型の埃っぽいロープを持って出て来た。それは、驢馬か犢ごうしを繋ぐのに使う端綱はづならしかった。

「これしかないんです。どうやらわたしの紐もこれ以上先がないらしい*1」

「そういえば、だいぶ落胆の様子ですね」とガス先生はいった——「強壯剤が必要でしょう。この薬品鞆が張り裂けたのも、あなたに強壯剤を服のませなさいという自然の思し召しだったのかも知れませんよ」

「わたしが服みたいと思う強壯剤といえば、青酸ぐらいのものです」と《昇る太陽》の主人が答えた。

「そいつは絶対におすすめしないことにしている」と医者いしやは陽気にいった。「服のんだときにはとても気分がいいが、そのあとの完全な回復は請合うけあいかねますからね。が、それにしても、まったく意気銷沈の御様子だ。なにせ、わたしが自分の宿賃を払うなぞという突拍子もないことをやらかしたときでさえ、あなたは陽気になりませんでしたからね」

「いや、ほんとにありがとうございました、お客さま」と主人はぶっきら棒に礼をいう——「ですが、この腐りかかった古宿が潰れてしまうを防ぐには、よほどたくさんの勘定が必要ですよ。以前、河向うの私道が開放されていて、みんながこの浅瀬を渡っていた頃には、この宿もけっこう繁昌したんですが、どうしてか、いまの代の地主がその徑みちを閉鎖してしまい、いまじゃ、だれも

かれもが、一哩先の新しい橋を渡るようになり、ひとりもこっちを通るものはありません。あなたは別ですが、こっちへくるひとがないのは当然ですよ」

「そういえば、その新しい地主さん自身も殆んど破産状態だという話じゃありませんか」とガース先生。

「かくて歴史は復讐を行う、というわけですな。ウェスタメインというのが地主さんの名前でしたね？ あそこの大きな屋敷には、兄と妹が、ごく僅かな財産を頼りに、ふたり暮しをしていると聞きました。どうやら、この辺一帯が落ちぶれているようですね。といっても、ここにだれもやってこないというのは、あんたの間違いだ」といつてから、ガース氏はだしぬけにことばを添えた——「ほら、ふたりのひとが丘を越えてやってくるじゃありませんか」

道路は河に対して直角に谷間を横切っており、浅瀬の対岸の斜面には、忘れられた私道がさらにかすかに見え、それを眼で辿ってゆくと、ウェスタメイン僧院^{アズナ}の所在を示す荒廃した門が、嵐の前兆であるかのような不気味さをかすかに帯びた蒼白い雲を背に黒々と立っていた。ところが、谷の反対側の空は晴れわたっており、午^ひすぎても間もない午後の光が、朝と変らぬ明かるさと活気を呈していた。さて、この晴れあがったほうの側の丘を越えている白い道を、ふたつのひと影が進んで来たのであるが、遠く離れてい

★1—とことんの窮地に追いこまれたという意味。

詩人と狂人達

るためにまだ点としか見えないときでさえ、ふたりの様子は際だって対照的だった。

宿屋に近づくにつれ、ふたりの対比はますます烈しくなり、腕を組まんばかりにして歩いてくるふたりの親密そうな様子が、かえって対比を強めていた。ひとり是比较的に背が低く、きわめて屈強な軀つきであるのに対し、相棒は並はずれて背が高く、すんなりした軀つきだった。ふたりとも揃って金髪であったが、丈の短いほうの男の髪はきちんと分けられ、なめらかに頭に撫でつけられていたのに対し、相棒の髪は、奇想天外に見える幾つもの細い束となってぼさぼさと立っていた。小柄なほうの男の大きな四角い顔には、非常に尖った鼻と、鼻をまるでちいさな嘴のように見えさせる冴えた、鳥のような眼とがあって、鋭さを加えていた。鳥といえば、この男にはどこことなく雄雀じみたところがあつたが、實際の話、かれは田舎の鳥というより、町の鳥らしい様子をしてた。服装は事務員のようにきちんとして平凡であり、まるでロンドンに出勤する途中だといわんばかりの、事務的な感じの小鞆を携えている。いっぽう、のっぽの連れは、たるんだリュックサックと、あきらかに画家の携帯道具とおぼしき物を背にくくりつけていた。このほうの顔は細長く、やや蒼白で、ぼんやりした眼をしていた。その下の顎は前に突き出ていたが、その様子たるや、うつろな青い眼が気づかぬまに、顎が無意識のうちに独立宣言を発したといったところだった。ふたりはともに若かった。そして、帽子をかぶらずに歩いていたが、それはおそらく、歩き続けたために暑かったせいであろう。ひとりは、しまった麦藁帽を手に持ち、相棒は、しまりのない鼠色のフェルト帽をいい加減に背囊につっこんでいたのである。

ふたりは宿屋の前に来て足を停めた。すると、ちいさいほうが連れに向って陽気にこういった——「なんととっても、ここはきみの仕事の領分だ」

いいおわるとかれは、威勢のいい丁重な口調で主人に呼びかけ、ビールを二杯持ってくるように頼んだ。そして、憂鬱そうな主人が憂鬱な接待屋のなかに姿を消すと、こんどは医者の方に向って、やはり晴々とした冗舌で——

「こいつは画家でしてね」と説明した。「といっても、かなり特殊な画家なんです。まあ、建物専門の画家といったところですが、かといって、普通ひとがいう意味でのそれとも違うんです。びっくりなさるかも知れませんが、これでもこいつは王立美術院の会員ですよ——といっても、その会員にありがちな黴くさい画家とも類を異にしますがね。若手の天才派中の一流画家で、この連中のひねくれた画廊に出品してるんです。ところが、こいつの一生の念願と誇りは、宿屋の看板を塗り直しに歩き廻ることにあるんです。こんな気まぐれをもった天才には毎日めぐりあえるものじゃありませんよ。この宿屋の名はなんというのですか？」

こういつてかれは爪先で立って首を伸し、異常な潑刺さを抑えた好奇心をもって黒ずんだ看板を見つめた。

「ふん、《昇る太陽》か」とかれは、口をきかぬ友人の方に熱心そうに向き直った。「きみはけさ、れっきとした宿屋を更生させるんだといっていたが、するとこれはまさしく前兆といったところだな。こいつはとても詩的な男で、看板の塗り直しをやれば、イギリス全土に日の出が訪れるといってるんです」



「だが、わが大英帝国に日没なしと世間のひとはいつてますな」と医者が笑い声で述べた。

「ぼくは英帝国に関しては、それほど強くこのことを感じてません」考えがひとりでに声になって出たといった調子で沈黙を破った画家が、そっけなくいった。

「なんといおうと、まさかエヴェレストの頂上かスエズ運河のほとりのどこかにイギリスの宿屋があるなんてだれも考えないでしょう。それに反して、英国内の零落した宿屋を覚醒させ、再び英国的かつ文明的に仕立てあげるために一生を捧げるのは無駄ではありません。もしぼくにこれをやりとげる力があるのなら、死ぬまでこれに専念したいのです」

「もちろん、きみにはその力がある」と連れの男がそれに答えた。「きみのような画家の描いた絵が宿屋の軒先に吊りさげられれば、その宿屋は数哩四方に亘って有名になるにきまつてる」

「すると、あんたが、宿屋の看板といったとき画題に御自分の容易ならぬ才能を使われるというのは、本当の話なんですか？」
「たとえ画題としても、これ以上に立派な画題がほかにありますか？」と画家が訊く。いまやかれはお気にいりの話題に夢中になっている様子だった。かれは、ぼんやりとして口をきかずにいるか、そうでないときには激烈に口角泡をとばすか、そのどちらかしかできない性質なのである。「いったい、金の鎖を身につけて乙に澄ました市長や、ダイヤモンドをちりばめた冠を戴いた、詐欺漢的な百万長者の妻をモデルにして美術院向きの肖像画を描くほうが、うまいビールで乾杯される英国の大提督の頭部を描くよ